

共同注意確立過程における 話し手による指示詞の質的素性の選択*

平 田 未 季
秋田大学

In recent studies, it is assumed that the most basic function of demonstratives is to coordinate the joint attentional focus for communication (Diessel 2006). In a related vein, this paper analyzes the use of demonstratives in the process of establishing joint attention between interlocutors in spontaneous interaction. Specifically, I focus on the role the qualitative features of demonstratives play in this process and show how speakers select them in order to minimize imposition on addressees based on the status of their attention.

キーワード： 指示詞、質的素性、共同注意、相互行為、自然談話

1. はじめに

本稿では、会話参加者が、意図する対象に共同注意 (joint attention) を確立しようとする場面に注目し、その過程において、話し手が、発話ごとに変化する聞き手の注意の状態をモニターしながら、指示形式を選択している様子を示す。伝統的な指示詞研究では、指示詞の主機能は発話空間を分割 (demarcation) し、そこに対象を定位することだとされてきたが、近年、より伝達的な側面から指示詞を定義する研究が出始めている。そのような研究の 1 つである Diessel (2006) は、従来の研究が指示詞の伝達的な側面を無視していることを問題とし、指示詞の第一義的な機能は、意図する対象に共同注意を確立するため、会話相手の注意の焦点を調整することであると主張した。

この主張に基づき、本稿では、話し手による指示形式の選択を分析するために、筆者が収集した自然談話データの中から、会話参加者が、意図する対象に聞き手の注意を誘導し

* 本研究は JSPS 科研費 (課題番号: 16K16816) の助成を受けたものである。本稿の執筆に際し、編集委員と 3 名の査読者の方々に、多くの貴重なコメントと改善のための建設的な指摘をいただいた。ここに記して感謝の意を申し述べたい。山本真理氏からは、データの転記、その解釈において有益な意見をいただいた。ただし、当然ながら、本稿の不備および誤りの責任は全て筆者に帰するものである。

共同注意を確立させようとする活動（以下、これを共同注意確立活動と呼ぶ）を行っている場面を分析の対象とした。具体的には、話し手が特定の対象に向けて会話相手の注意を誘導・調整するための行動を開始した時点から、会話相手の反応によりその対象に共同注意が確立したと解釈することが可能になった時点までを1つのまとまりと捉え、分析の対象とした。近年、自然談話データを用いた指示詞研究は増えつつあるが、伝統的な文法研究と同じように単一の文を分析対象とする研究もあれば、複数の発話を含む談話レベルの分析を行う研究もあり、それぞれの研究が自然談話データの中で分析の対象となる範囲を任意に設定している。本稿では、共同注意確立活動を分析単位とし、その活動中から活動終了後にかけての指示形式の分布を分析することで、話し手が、時間軸に沿って展開する談話の中で、発話ごとに変化する動的な要因に基づき指示形式を選択している様子をより明確に示すことができると考える。

本稿では、共同注意確立活動に注目した指示詞分析の一例として、日本語指示詞の質的素性 (qualitative feature) の分析を提示する。質的素性とは、指示対象を分類するための情報であり、日本語指示詞では、「コ-」、「ソ-」、「ア-」に後接される接尾辞「-レ」、「-コ」、「-ッチ」等がこの情報を担っている。これまで、日本語指示詞に関する研究でも、他の言語の指示詞に関する研究でも、この質的素性に対する語用論的な分析はほとんど行われてこなかった。本稿では、ガイドが複数の聴衆に対して説明を行う場面を例とし、共同注意の確立が比較的困難な文脈において、話し手であるガイドが、対象の特定における聴衆の負荷を減らすべく、聴衆の注意の状態をモニターしながら戦略的に指示詞の質的素性を切り替え、共同注意の焦点を操作していく様子を示す。

2. 自然談話データを用いた指示詞研究

指示詞は文脈依存的 (context-dependent) な性質を持つ直示表現の1つであるが、従来の言語類型論的研究は文法書等の二次的なデータを、その枠組みを用いた個別言語の指示詞研究は内省に基づく作例を主な分析対象としており、指示詞使用の実態が実際の状況の中で検証されることはほとんどなかった。これに対し、90年代頃から、言語の使用場面に基盤をおく研究への関心の高まり、またその詳細な観察を可能にする撮影機器や分析技術の発達を背景に、相互行為的な文脈を分析に導入した個別言語の指示詞研究が発表され始めた (Hanks 1990, Laury 1997, Özyürek 1998, Strauss 2002, Burenhult 2003, Enfield 2003, Meira 2003 等)。

彼らは、従来の研究が ‘proximal’、‘distal’ という話者中心で静的な概念を指示詞分析の中心においてきたことを批判し、自発的な相互行為場面の撮影・録音データ (Hanks 1990, Özyürek 1998, Burenhult 2003, Enfield 2003)、口語コーパス (Laury 1997, Strauss 2002) 等を用いて、個別言語の指示詞の意味機能を再検証した。これらの指示詞

研究は、指示詞が発話された場面の物理的な文脈情報のみならず、発話ごとに変化する聞き手の注意や知識の状態、それに基づく対象へのアクセス可能性という相互行為的な文脈情報を取り入れた分析を行うという共通点を持つ。

しかし、データから分析対象となる範囲をどのように切り取るかという点に関しては、それぞれの研究で異なりが見られる。(1)のように、指示詞を含む単一の文のみを分析対象とする研究もあれば、それに対する応答も分析対象に含める研究、さらに(2)のように複数の指示詞を含む一連の会話を分析対象とする研究もある。

(1) Enfield (2003) によるラオ語 (Lao) 指示詞の分析¹

(市場で肉の値段を聞いた客に対し)

Merchant: Nan⁴ one is 16 per kilo.

(Enfield 2003: 95, 括弧内, 下線は筆者による)

(2) Strauss (2002) による英語指示詞の分析

(空港の荷物検査に関する実験を行った Schiavo に Lauer がニューススタジオでインタビューを行っている)

Lauer: you expected that bag ta go onta Washington withouchu on the plane
= and thee airport did (.) stop the bag, didn't they?

Schiavo: Absolu:tely. Fer whatever reason, that bag was sto::pped.

((2 skipped turns))

Lauer: Now were you trying ta make this- this package this suitcase look like a bomb? (Strauss 2002: 134, 括弧内, 下線は筆者による)

Strauss (2002: 132-134) は、一連の会話を分析対象とすることで、(2)のように、1つの対象を指すために複数の指示形式が用いられるという従来の研究では指摘されてこなかった指示詞の用法と分布が観察できると述べた。トルコ語指示詞を分析した Özyürek (1998)、ジャハイ語 (Jahai) 指示詞を分析した Burenhult (2003) も同様の現象を指摘している。彼らは、このような指示形式の交替を説明するために、話し手が聞き手に求める注意の強弱の度合い (Strauss 2002)、対象に対する聞き手の注意の状態 (Özyürek 1998, Burenhult 2003)、対象への認知的なアクセス可能性 (Burenhult 2003) 等、会話参加者の間の相互行為と密接に関連する動的な概念を分析に導入した。

指示形式の交替を分析する研究の多くが「注意」という概念を用いていることは興味深い。本稿では、これらの研究が注意に関わる概念を用いて記述する指示詞使用の背景に

¹ nan⁴ はラオ語指示決定詞 (demonstrative determiner) であり、同じく指示決定詞である nii⁴ とともに2項対立の体系を成している。Enfield (2003) は、ラオ語の例を記述する際、分析対象である指示決定詞以外は英語で表記している。

は、言語を用いたコミュニケーションの根本に関わる共同注意という事象があると考え、自然談話データを用いた指示詞分析において、共同注意確立のための一連の活動を分析の単位とすることを提案する。共同注意確立活動は、文の数や長さという言語的な単位ではなく、共同注意の確立という指示詞の伝達的な機能を基盤とした分析単位である。この活動を分析単位とすることで、指示形式の交替が会話参加者間の相互行為の中で伝達的な目的達成のために行われていることがより明確になる。

指示詞と共同注意の密接な結びつきは、Diessel (2006) を始めとする指示詞分析の枠組みに関わる研究において指摘されている。次節では、これらの研究を簡単に紹介した上で、本稿が分析対象とする共同注意確立活動の定義を行う。

3. 共同注意の確立と指示詞の使用

3.1. 指示詞の伝達機能

2 節で紹介した個別言語の指示詞研究と前後し、指示詞に関する理論的な研究においても、使用場面に即した分析の重要性が指摘され始めた。Diessel (1999)、Levinson (2004) は、指示詞体系には空間情報を持たない形式も含まれるという経験的な観察をもとに、指示詞の最も重要な機能は、話者を中心とした対象の空間定位ではなく、会話相手の注意を発話場面の物理的な文脈に引き付けるという伝達的な機能であると主張した (Diessel 1999: 2, 37-38, Levinson 2004: 101)。Diessel (2006: 469) は、この会話相手の注意の引き付けという指示詞の機能は、話し手が意図する特定の対象に向けて共同注意を確立させようとする過程において寄与すると述べた。

共同注意とは、話し手と聞き手がある対象に注意を向けており、かつその事実を互いに共有しているときにのみ成立する社会的な相互作用である (Tomasello 1995, 1999, Eilan 2005)。前言語期の子どもは、他者と注意を共有するため、指さし等の直示ジェスチャーおよび頭や視線の向きを手がかりとするが (Corkum and Moore 1995: 63)、やがて、共同注意を操作するための新たなツールとして言語を獲得する (Tomasello 1999, ch. 4)。その獲得段階の初期に生じ、前言語期の共同注意行動と共起することが多い指示詞は、言語表現の中でも共同注意の確立と最も密接に結びついた範疇だとされている (Diessel 2006: 469 等)。

3.2. 共同注意確立活動

以上の議論に基づき、本稿では、自然談話データを用いた指示詞の分析において、会話参加者が特定の対象に共同注意を確立させようとする場面で生じる一連のやりとりを共同注意確立活動と呼び、これを分析対象とすることを提案する。具体的には、会話参加者の1人が特定の対象へ共同注意を確立させようとする行動を開始した時点から、共同注意が

確立されたことが会話参加者間で認識可能となったと話者がみなし、その行動を停止する時点までを1つのまとまりと捉え、その活動中から活動終了後にかけての指示形式の分布を観察する。活動の範囲については、前言語期から共同注意行動として使用されている指さし等の直示ジェスチャーの開始・終了および頭や視線の向きの変化、そして、それまでの活動との切り替わりを示す言語行動を指標とし、これらを複合的に考慮して開始時点と終了時点を判断する。

筆者が収集した自然談話データから共同注意確立活動の例を1つ挙げる。データの詳細については5.1節で詳述するが、(3)は、話し手であるガイドGが、桜並木に向けて聴衆の注意を誘導しようとしている場面である。²

(3) ソメイヨシノ

01 (Gは聴衆と雑談をした後、笑いながら徐々に視線を指示対象の方に向ける)

02 G: じゃああのー 今駐車場の方見ていただいてますが ここ
| 駐車場を見ながら右手を差し出す

03 G: 今ね 葉っぱだけなので何が何だか分からないと
| 並木をなぞるように右手を左方向に移動

04 G: と思いますが これ ソメイヨシノです
| 手をおろす | 聴衆の方に向き直る

05 A: ああー

06 G: 2キロの花のトンネルと言われているソメイヨシノになりますね

07 G: およそ四百本ほどあります

08 A: へえー

² 以下の例において、下線部は指示形式を、点線部は対象特定のため用いられる実質名詞を示している。また、「G」はガイドの発話を、「A」～「D」は聴衆の発話を表す。「?」は発話者が分からない発話を表す。囲み点線は共同注意確立活動の開始から終了までを示している。発話と同時に行われたジェスチャーは発話の下行に記載し、「|」によりジェスチャーの開始時点を表す。発話前後の動きは、独立した行の括弧内に記載する。紙幅の都合上、共同注意確立活動外のジェスチャーの記述は省略する。

また、例に添えられた図における「SPKR」、「ADDR」、「REF」はそれぞれ、話し手、聞き手、指示対象を示している。



図1 活動開始前

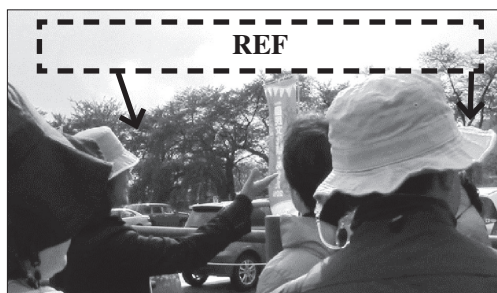


図2 02行目

Gは雑談の間、聴衆と目を合わせていたが、01行目で笑いながら徐々に視線を意図する対象である桜並木の方に移動させていく。そして02行目で「じゃあ」と発話を開始し、指示対象が位置する方向に視線を固定し、右手でそちらを手さししながら「ここ」と発話する。この視線の移動と、手さしという直示ジェスチャーの開始により、Gは共同注意確立活動が開始されたことを聴衆に明示的に示し、さらに直示ジェスチャーとともに指示詞を発話することで聞き手が物理的文脈に注意を向けるべきであることを知らせる。そして04行目で、対象特定のために十分な情報を与えたと認識したGは、手を下ろして直示ジェスチャーを終了し、体ごと聴衆の方に向き直り、視線を指示対象から外す。05行目の聴衆の「あー」という反応は、桜並木に共同注意が確立したという話し手の判断を保証し、さらに聴衆はそれがソメイヨシノだと理解したということを示している。このように対象に対する注意の共有が会話参加者全員に明白になった時点で、共同注意確立活動は終了し、06行目以降では、Gは桜並木についての説明という次の活動に移行する。

このような共同注意確立活動は、指示対象の特定しやすさや聞き手の注意の状態に応じて、そこに含まれる指示形式を用いた指示（reference）の数が変化する。(3)のように、2つもしくはそれ以上の指示形式が用いられる活動もあれば、1つの指示形式で共同注意が確立したとみなされるケースもある。³ 本稿では、1つの対象を特定するまでに、2つも

³ 1つの指示詞で共同注意が確立したとみなされる例を角館データから1つ挙げる。

(i) しだれ桜

(Gは通りの途中で立ち止まり、後ろを振り返って聴衆が追いつくのを待つ)

01 G: で これ あの一
 |正面の聴衆を見たまま右手を180度回して左横の桜を手さしする
 02 G: 道路にしだれているの はすべてしだれ桜になります
 |右手で円を描く |右手を下ろす
 03 ?: ふーん

(i)の指示対象であるしだれ桜はかなり大きい木であり話者のすぐ隣にある。筆者が収集したデータの中で、1つの指示形式で共同注意が確立したと話し手がみなすケースは、指示対象が話し手もしくは聞き手に明らかに近接している場合が多かった。一方、本稿が分析対象とする複数の指示形式

しくはそれ以上の指示形式を用いた指示が行われる共同注意確立活動を分析対象とする。指示形式切り替え前後の文脈を観察することで、聞き手との相互行為の中で話し手がどのような要因に基づき指示形式を選択しているのかを明らかにすることができるからである。実際にデータを分析する前に、次節で、本稿が分析する指示詞の質的素性の概要を紹介する。

4. 指示詞の質的素性

通言語的に、指示詞の意味は、直示素性 (deictic feature) と質的素性の2つから成る (Diessel 1999: 35)。前者は直示中心から指示対象までの相対的距離等の空間情報を、⁴ 後者は指示対象を分類する上での情報 (指示対象が物体か人か場所か、女性か男性か、単数か複数か等) を表すとされている。直示素性と質的素性は、英語指示詞の *this*, *that*, *these*, *those* のように、不可分の単一形態素から成る指示形式の中に混ざり合っている場合もあれば、異なる2つの形態素がこれらの素性を独立して担っている場合もある。例えばトルコ語指示詞 *bura* では、話し手への近接性を示す *bu* は直示素性を、指示対象が場所であることを示す接尾辞 *-ra* は質的素性を担っている。

日本語指示詞も、トルコ語と同様に、直示語根「コ-」、「ソ-」、「ア-」と、接尾辞「-レ」、「-コ」、「-ッチ」等がそれぞれ直示素性と質的素性を表している。⁵ しかし、国語学・日本語学の分野では、直示素性に関する研究は数多くあるが、質的素性に焦点を当てた研究は非常に少ない。佐久間 (1936) は、「コソアド」とそれに後接する形態素が一連の語彙として体系を成していることを指摘し、これを「指す語」と呼んだ。寺村 (1968) は、名詞を意味的に分類する中で、指示詞の質的素性について触れ、「コソアド」に後接するそれぞれの形態素が示す素性は、「日本人が外界の事物や概念をどう類型化しているかを暗示する」(p. 56) ののだと述べた。指示詞研究では、金水 (1990) が質的素性「-チラ」を取り上げ、これが「方向」から派生した「二極選択」という用法を持つことを指摘した。また、小川・澤田・大谷 (2011) は、コーパス調査に基づき、「-イツ」の指示範囲の拡大に関する分析を行った。

以上のように、質的素性に関する先行研究は非常に限られており、金水 (1990)、小

を含む事例は全て、指示対象が対話参加者からある程度離れた位置にあるときに生じていた。

⁴ ただし、上述の通り、近年の指示詞研究では、距離等の空間概念に加え、聞き手の注意の状態に関連するより相互行為的な要因を用いて直示素性を記述している。

⁵ 日本語指示詞には「この」の「-ノ」、「こう」の「-ウ」等、指示形式が現れる統語環境に関する情報を表示する形態素も含まれる。これらは統語素性 (syntactic features) と呼ばれるべきものであるが、本稿では、便宜上、直示素性を表示する「コ-」、「ソ-」、「ア-」に後接する形態素が持つ情報をすべて質的素性と呼ぶ。

川・澤田・大谷（2011）等の数少ない例外を除けば、「本」なら「-レ」、空間であれば「-コ」というように、話し手が対象の内在的識別特性（intrinsic differentiating properties）に応じて質的素性を選択することが前提とされてきた。⁶ しかし、実際の運用においては、話し手は常に対象の内在的識別特性のみに基づいて質的素性を選択するわけではない。例えば、本を指す場合、常に「これ」が選択されるとは限らない。本そのものを指す代わりに「ここ」、「こちら」を用いてそれが存在する空間を指す場合もあれば、実質名詞を伴った「この本」もしくは「この本」、「こちらの本」という指示も可能である。さらに、自然談話データでは、(3) のように、1つの対象への共同注意の確立までに、これらが組み合わされて使用される例も頻繁に観察される。このように多様な指示の形式を話し手はどのように使い分けているのか。次節では、自然談話データを用いて、共同注意の確立という相互行為上の目的を達成するため、話し手が聞き手の注意の状態をモニターしながら質的素性を選択し分けている様子を示す。

5. データ分析

5.1. データの概要と分析対象

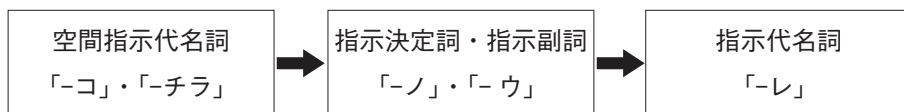
本稿で用いるデータは、2014年10月に、秋田県仙北市角館町の武家屋敷街通りにおいて撮影したデータ（以下、角館データ）である。本データでは、歴史案内人である同町出身のガイドが、聴衆10数名に対し、通りを歩きながら町の歴史や建造物について説明をする60分の観光案内を実施している。その様子を撮影した50分のビデオデータから、46例の共同注意確立活動が抽出された。この46例のうち、2つ以上の指示形式を含む共同注意確立活動11例を本稿の分析対象とする。

5.2. 共同注意確立活動と質的素性の分布

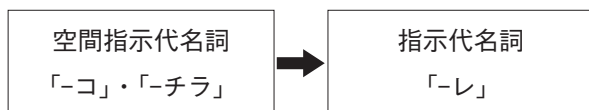
11例の活動中から活動終了後にかけての質的素性の主な分布を図3に示す。

⁶ 2節で紹介した自然談話データを用いた指示詞研究においても、質的素性に関する言及は非常に少なく、ほとんどの研究が指示代名詞や場所を表す指示副詞を分析から除き、分析対象を指示決定詞に限定している（Enfield 2003, Burenhult 2003 等）。唯一、Strauss (2002: 150-151) は、コーパス分析に基づき、英語指示詞の *this* と *that* が現れる統語環境を調査し、*this* は指示決定詞として用いられる頻度が高いのに対し、*that* は指示代名詞として現れる頻度が圧倒的に高いと述べ、この差は両形式が聞き手に求める注意の強さの違いに基づくとして述べている。指示詞が現れる統語環境が、聞き手の注意の状態と関連して決定されたとする Strauss (2002) の主張は、本稿の結論と深く関わっており興味深い。この点に関する対照研究は今後の課題とする。

a. 4 例



b. 3 例



c. 4 例

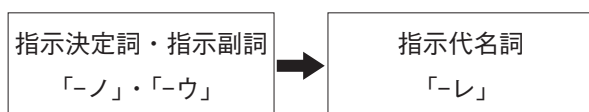


図3 角館データにおける質的素性の分布

以下、それぞれのタイプについて例を挙げながら説明する。

5.2.1. a タイプの例

a タイプの4例では、活動中からその後にかけて3種類以上の質的素性が用いられていた。4例のうち2例を以下に提示する。

(4) コピトマチ⁷

(ガイドGは聴衆の先頭に立って道路を渡る。渡り終わってから歩みを止め、後ろを向き話し始める)

01 G: はいこちらの方まっすぐ来たらドンとぶつかりますね ひとつの町内しか見えません(後方の聴衆が着いてきているか確認する)

02 G: でこの 鉄柱

↑右方の鉄柱に顔を向け手を上げて鉄柱を指す

03 (ちらっと聴衆を見てから、すぐに鉄柱に視線を戻す)

04 G: またふきやさんですが

↑上げた手を下方に移動させる

⁷ 「コピトマチ」の例のように、共同注意確立活動中から活動後にかけて、質的素性のみならず、直示素性も切り替えられる例が多く観察される。本稿では、質的素性を分析対象とするため、この点については触れないが、筆者は、直示素性も、質的素性と同様に、効率的な共同注意確立を目的とし、聞き手の注意の状態に基づいて選択されていると考える。この点についての詳しい議論は平田(2016)および平田・山本(2016)を参照されたい。

- 05 ? : んー
- 06 G: その下に 町内名が書いてあります
 |手を指さしに変える |指さしをやめる
- 07 ? : ああー
- 08 G: これはー
- 09 B: 普通どおりに読むの?
- 10 G: はい (Bを見て) これは素直に読んでください
- 11 ? : ショウニンマチ
- 12 G: コ コビトマチ
- 13 ? : コビトマチっ
- 14 ? : へえー (複数の歓声)



図4 02行目



図5 06-07行目

(4) の指示対象は、鉄柱に貼られた小さな町内名の表示である (図4 参照)。そのため、G は (3) のように直接指示対象を指すのではなく、より特定が容易な対象をランドマークとして指示しながら、聞き手の注意を対象に向けて調整していく。

まず、活動開始直前の01行目では、聴衆は道路を渡り終わり、互いに話をしながらばらばらに歩いている状態であった。Gはその状態を確認してから、02行目で「で」と発話を開始すると同時に、指示対象が含まれる道の向こう側の鉄柱に視線を向け、聴衆の移動を遮るように右手を大きく伸ばして、共同注意確立活動の開始を伝える (図4 参照)。そしてGは鉄柱を「ここの鉄柱」と、空間指示代名詞と実質名詞を組み合わせた形で指示する。その後、04行目で鉄柱に貼られた比較的大きな「ふきや」という食堂の表示を指した後、06行目で指示決定詞に位置名詞を後接し「その下」と発話すると同時に、手さしを指さしに変えて、鉄柱に向けられた聞き手の注意の焦点を意図する対象に向けて調整していく。そして、指示対象を「町内名」と実質名詞で指すと同時に、指さしを停止する (図5 参照)。07行目で複数の聴衆から「ああー」と反応が起こり、共同注意が成立したことを会話参加者が確認できた時点で、活動は終了する。08行目から、Gは、町内名の

読み方に関するクイズという次の活動に移行するが、その際、町内名は「これ」という指示代名詞で指されている。

角館データから同様の例をもう 1 つ挙げる。

(5) ホホツエ

(ガイド G が背後にある蔵について聴衆に説明をしている)

01 G: ところが 二月三月の雪解けの時期になりますと土が混じって今度は雪がね汚くなる

02 ?: 汚い

03 ?: 汚いの

04 G: これがし全部白だと蔵に汚れがつくということで ま カバーですよ

05 ?: ふーん

06 G: を こう カバーをつけてます

07 (聴衆と向かい合っていた G は体を後方に向けて顔を上げ、蔵の上部を見上げる)

08 G: それからまたここにこう つっかえ棒があります
| 蔵の上部に向け手を上げる | 上げた手を右から左へ移動させる

09 ?: つっかえ棒があります

10 G: これ全部こううちのまわりグルッと
| 上げている手を指さしに変え、指さしで円を描く

11 G: これはホホツエといいます
| 指さしを下ろし、聴衆の方に向き直る

12 (G の正面の聴衆数名が頷く)

13 G: みなさんはホホツエはどんな時に使いますか?

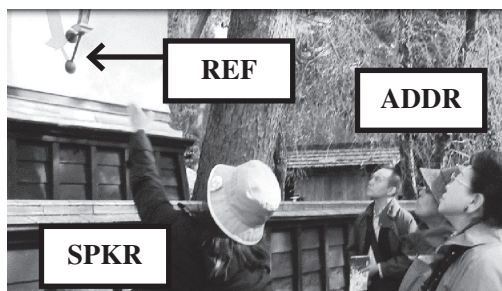


図 6 08 行目



図 7 11 行目

(5) の共同注意確立活動開始前、G は蔵の前に立ち止まり、正面の聴衆に視線を向けながら、蔵の造りについて説明を行っていた。06 行目で説明をひと段落させた後、07 行目で

Gは、背後を振り返り、指示対象である「ホホヅエ」がある蔵の上部に向けて頭を上げる。聴衆はそのGの頭の向きと視線の変化を追い、顔を上げ、Gの意図する対象を検出しようとする。Gが共同注意行動を始めたこの時点を中心として共同注意確立活動の開始時点と考える。続けて、08行目でGは「それから」と発話すると同時に、蔵の上部に向けて左手を大きく上げ、「ここ」と空間指示代名詞を用いて対象が含まれる空間を指す（図6参照）。さらに、続けて「こう」と指示副詞を発話し自らのジェスチャーに注意を向けさせると同時に左手を指示対象が位置する箇所に向けて移動させ、「つかえ棒」という実質名詞で聞き手が注意を向けるべき対象を特定する。09行目でその説明に対する聴衆の反応が生じるが、Gは直示ジェスチャーを停止せず、「これ」、「こう」と指示代名詞を用いて物理的文脈へ注意を向けることを要求し続け、聞き手が注意を向けるべき対象は1つではなく複数であることを伝える。「こう」という指示副詞と、それに伴う円を描くという図象的（iconic）ジェスチャーによって、複数の「つかえ棒」が蔵を取り巻いていることを伝えた後、11行目でようやくGはジェスチャーを停止し、頭の向きと視線を聴衆に向け、「ホホヅエ」という指示対象の名称を導入する。12行目で、視線を向けられた複数の聴衆が頷きを見せたことで、Gは注意の焦点が共有され、その名称が「ホホヅエ」であることも理解されたと解釈し、「ホホヅエ」に関するエピソードの披露という別の活動に移行する。

以上の2つの例では、話し手であるGは、指示詞の質的素性を切り替えながら、意図する対象もしくはランドマークとなる対象周辺の事物を指し、段階を踏んで指示対象へ聞き手の注意を誘導している。これらの例の共通点は、発話場面で指示対象の特定が困難であり、対象を直接指示するだけでは共同注意確立のための聴衆の負荷が大きいとGが考えているという点である。以下、指示対象の特定が困難な場面について、共同注意行動の発達段階を参考として考察する。

6か月から18か月の幼児の共同注意行動の発達を調査した Butterworth (1995) は、共同注意行動には以下の3つの発達段階があるとし、後者ほど、対話相手が意図する対象を検出するうえでの負荷が高く、その出現が遅れるとしている。

(6) 共同注意確立のための行動の3つの発達の段階

- a. 視野内で相手が見た方向へ頭を向け、走査線（scan path）上にある最初の目標物を特定する。
- b. 相手の視線を追い、視野内の複数の候補の中から正確に目標物の位置を捉える。
- c. 視野内に目標物がないとき、背後を参照して目標物を特定する。

(6a) に比べ、獲得が遅れる (6b) の場面では、複数の候補から意図する対象を検出しなければならないため、細かな注意の調整（attention-coordinating）が必要になる。(6c) の

場面では、頭を動かし視野外の対象を検出するため、注意の転換 (attention-switching) が必要とされる。この調査は主に前言語期の幼児を対象としたものだが、本稿では、言語を用いる成人間のコミュニケーションにおいても、(6a) に比べ (6b, c) の場面では話し手の意図する対象の検出がより困難であるため、共同注意の確立までに複数の指示形式が用いられる傾向があると考えられる。

角館データから抽出した3種類以上の質的素性を含むaタイプの共同注意確立活動4例は全て、上述の、注意の転換、注意の調整という段階を経て、共同注意の確立に至っていた。(4)、(5) で示した通り、この各段階で、話し手は質的素性を図8のように切り替えていた。以下、それぞれの段階における質的素性の分布について説明する。

まず、「-コ」、「-チラ」を用いた注意の転換は、指示対象を検出するために聞き手が頭の向きを変える必要がある場面で生じる。このような場面では、話し手は直接対象を指さず、まずは聞き手の注意を指示対象が含まれる空間へ誘導しようとする傾向がある。例えば、(4)、(5) では、話し手は、活動開始直後に「ここ」という空間指示代名詞を用いて、(4) では道の反対側に、(5) では蔵の上部に聞き手の注意を大きく転換させようとしている。

次に、視野内の複数の候補の中から意図する対象へと聞き手の注意の焦点

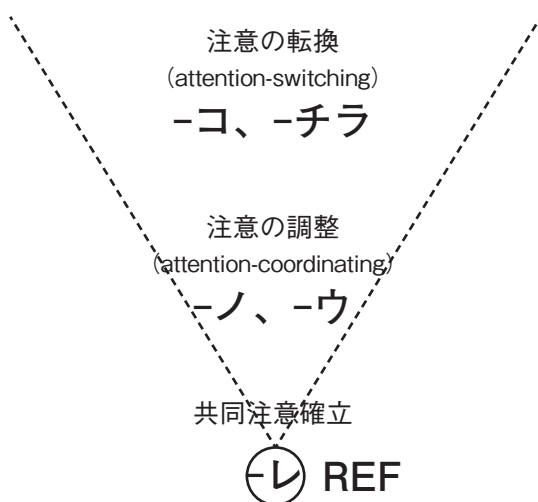


図8 共同注意確立過程における聞き手の注意の焦点と質的素性の分布傾向

を調整していく過程では、指示決定詞や指示副詞が選択される傾向がある。これらの指示形式の特徴は、その構造上、より特定のな情報を伴いうることである。指示決定詞はその後に必ずより特定のな実質名詞を伴う。また、指示副詞の場合、例えば(5)では、話し手は「こう」と発話することで自らのジェスチャーに注意を向けさせ、直示ジェスチャーに加え図像的ジェスチャーを用いて、聴衆が指示対象を特定するための手がかりを与えていた。実質名詞や図像的ジェスチャーが持つ文脈非依存的な情報は、聞き手の注意の正確な操作に寄与するものである (Tomasello 1995: 115 参照)。ただし、この段階では、話し手はこのような文脈非依存的情報をそのまま提示することはせず、必ず、直示ジェスチャーを伴う指示詞という文脈依存的な情報を付加する。これにより、話し手は、まだ共同注意確立活動は終わっていないこと、そのため発話場面の物理的な文脈から注意をそらすべきではないことを聞き手に伝えている。

最後に、やりとりから聞き手が意図する対象に到達したと話し手が解釈した共同注意確

立活動の後半、もしくはその終了後は、(4)でも(5)でも「-レ」が選択されていた。この質的素性の切り替えと、直示ジェスチャーの停止や視線の向きの変化により、話し手は活動前後のコントラストを形成し、共同注意確立活動が終了したこと、そのためもう物理的な文脈に注意を向け続ける必要はないことを聞き手に明示的に告げている。

5.2.2. b タイプの例

図3でbタイプとして示した共同注意確立活動には、図8における注意調整の段階が含まれない。角館データには、このような活動例が3例見られた。3.2節で(3)として提示した「ソメイヨシノ」はその1つである。(3)を(7)として再掲する。

(7) ソメイヨシノ

01 (Gは聴衆と雑談をした後、笑いながら徐々に視線を指示対象の方に向ける)

02 G: じゃああのー 今駐車場の方見えていたんですが ここ
| 駐車場を見ながら右手を差し出す

03 G: 今ね 葉っぱだけなので何が何だか分からないと
| 並木をなぞるように右手を左方向に移動

04 G: と思いますが これ ソメイヨシノです
| 手をおろす | 聴衆の方に向き直る

05 A: ああー

06 G: 2キロの花のトンネルと言われているソメイヨシノになりますね

07 G: およそ四百本ほどあります

08 A: へえー

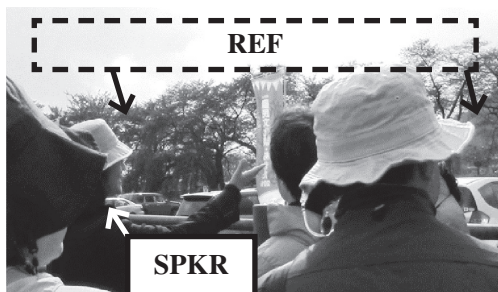


図9 02行目



図10 04行目

3.2節で述べた通り、Gは、自らの方を見ている聴衆の注意を、聴衆の右側に位置する駐車場へ転換させるべく、活動開始前から徐々に視線を移動させていく(01行目)。02行目で手でさしをしながら「ここ」と発話し、意図する対象が含まれる空間が聴衆の視野に確

実に入るよう、彼らの注意を誘導する（図9参照）。しかし、その後、03行目で手を緩やかに左へ動かした後は、それ以上指示詞は用いず、04行目で手を下ろし、すぐに「これ」という指示代名詞とともに「ソメイヨシノ」と対象の名称を導入する。このGの行動から、04行目の時点で聴衆が意図する対象を特定できたとGが判断していることが分かる。

(7)の共同注意確立活動において、(4)、(5)で行われていた指示決定詞や指示副詞を用いた注意調整の段階が見られないことは、(7)の指示対象は(4)、(5)のそれよりも特定が容易だという話し手Gの判断によると考えられる。(7)の指示対象である桜並木は、駐車場の奥に左右約2キロに渡り広がっている。従って、発話場面に複数の指示対象候補が存在する(4)、(5)とは異なり、(7)では、Gは、聴衆が駐車場の方向に注意を転換しさえすれば、指示対象を唯一的に特定することが可能だと判断することができた。そのため、Gは指示決定詞や指示副詞を用いた調整を行わず、注意転換の後、指示対象を直接「これ」と指したのだと思われる。

5.2.3. cタイプの例

最後に、図3でcタイプとして示した共同注意確立活動の例を1つ挙げる。この活動には、注意調整の段階はあるものの、活動冒頭の注意転換の段階はない。

(8) オカチマチ

(Gは道の隅で、周囲の聴衆に対して5分ほど町の歴史の説明を行っている)

- | | | | |
|----|----|--|---------------------|
| 01 | G: | であのー | |
| | | ↓鉄柱に視線を向けてから手元の地図に目を落とす | |
| 02 | G: | <u>この地図</u> にも書いてますこの鉄柱 | にも書いてますが |
| | | ↓地図の <u>一か所</u> を指す | ↓鉄柱を見て右手を上げる |
| | | ↓右手を下げ指さし | |
| 03 | G: | <u>食事処ふきや</u> なんて書いてます | |
| 04 | G: | <u>その下</u> に | 実は町内名が書いてます |
| | | ↓指さしを下方に移動 | ↓指さしを維持したまま視線を聴衆に移動 |
| 05 | C: | ホコウマチ | ホコウマチでしょ? |
| 06 | G: | はい | なんと読むと思います? |
| 07 | D: | なんて読むんでしょうねえ | |
| 08 | G: | ねえ わたしがわざわざ <u>これ</u> を紹介するっていうのは <u>この通り</u> 読ま | |
| 09 | D: | (首を横に振りながら)それは 絶対読まない | |
| 10 | G: | (Dに向かって)ね? | |
| 11 | D: | うん | |
| 12 | G: | ああー よく分かってます | |
| 13 | D: | んー (頷く) | |

- 14 (Gは電柱のほうに向き直り右手で再び看板を指すが、すぐ下ろす)
 15 G: これね オカチマチと読みます オカチマチ
 16 ? : オカチマチ?
 17 ? : ああー (複数の歓声)

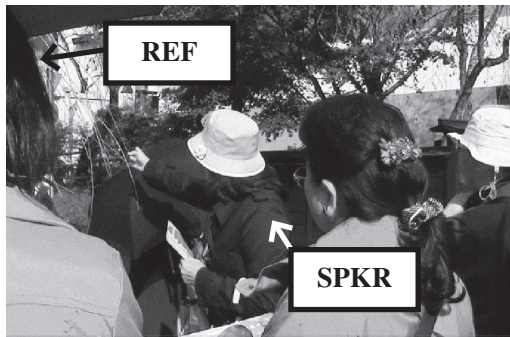


図 11 02 行目



図 12 08 行目

(8) では、活動開始前、話し手 G は道の隅に立ち止まったまま 5 分以上説明を続けており、その間聴衆も移動せず、視線を持続して G に向け続けていた。この (8) の活動前の状況と、5.2.1 節で提示した (4) の活動前の状況は対照的である。

(4) と (8) は、どちらも鉄柱に貼られた町内名の表示が指示対象であり、この対象への共同注意確立活動が町内名の読み方に関するクイズという活動の前段階になっているという構造も共通している。ただし、活動開始前の聴衆の注意の状態は (4) と (8) で大きく異なる。前述の通り、(4) の活動開始前、G と聴衆は道を渡って移動をしており、G が発話を開始した時点では、各人の位置も注意の向きもばらばらであった (図 13 参照)。それに対し、(8) では、活動開始前から聴衆は一貫して G に注意を向け続けている。01 行目で G が指示対象である鉄柱に視線を向け、「であのー」と発話した時点では、G の左側にいる聴衆の視野には指示対象が含まれているが、その他の位置にいる聴衆は指示対象を検出するため背後を振り向く必要があった (図 14 参照)。しかし、G は、(4) のように空間指示代名詞で対象が含まれる空間を指示することなく、活動の冒頭から指示決定詞「この」を用い、地図から鉄柱へと細かく聴衆の注意を誘導・調整していく。これは、活動開始時点で既に自らが十分に聴衆の注意を引き付けているため、聴衆は自分の行動に合わせ容易に注意の焦点を調整できるという G の判断によるものだと考えられる。それに対し、(4) では、G は発話開始前に首を伸ばし何度か聴衆の位置とその注意の向きを確認している (図 13 参照)。この聞き手の注意の状態に関する判断の差により、G は、ほぼ同一の鉄柱を、(8) では「この鉄柱」と指しているのに対し、(4) では「ここの鉄柱」と空間指示代名詞と実質名詞という有標な組み立てで指すことを選択している。



図13 (4)の活動開始前



図14 (8)の活動開始前

5.3. より相互行為的な共同注意確立活動との比較

以上、角館データを用い、話し手が、共同注意の確立が困難な場面で、聞き手の注意の状態をモニターしながら段階を踏んで指示を行っていること、そしてその各段階で指示詞の質的素性を切り替えていることを示した。以上のデータでは、話し手であるガイドの発話は非常によくオーガナイズされているため、話し手が段階を踏んで指示を行っている様子が明確に観察された。これに対し、より相互行為的な場面における共同注意確立活動の一例として(9)を提示する。(9)は、展望台における先輩の学生(B)と後輩の学生(A)のやりとりを撮影したデータの一部である。(9)の会話が始まる前、AとBは2人の左手の方向にある対象(REF1)について話していた。その話が終わった後、Aは右手の方向に気になる対象(REF2)を見つけ、そちらに向かって視線を移動させ始め(図15参照)、01行目の発話を開始する。

(9) なんとかドーム

- 01 A: あれは あれはドームですか なんとかドームですか
 |REF2 に向け腕を伸ばし指さし | 指を左右にふる
あれは
- 02 B: えっ どれ 山?
 |Aの方に歩み寄り、体を傾けて指さしの先を見る
- 03 A: あの白い山みたい な
 | 腕を伸ばしたまま指を細かく動かす | 指さしをおろす
- 04 A: ちょうどなんか雪ほんと雪山みたいな
 | 再び腕を伸ばして指さしをし大きく左右にふる
- 05 A: やつ あれなんですかね
 | 腕をおろす | 腕を組む
- 06 B: あ わかんない だってツドームこっちだもん
 | 一歩前に出て指さし

07 A: ですね 札幌ドームあんなじゃないですね

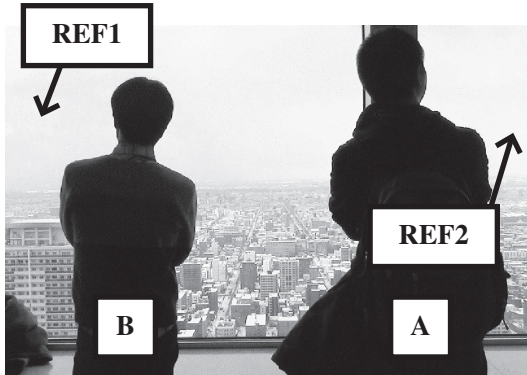


図 15 (9) の活動開始前



図 16 02 行目

01 行目の発話時に、A の意図する対象 (REF2) は B の視野外にあった (図 15 参照)。さらに、窓外には指示対象候補となるものが数多くあり、対象の特定のためには細かな注意の調整が必要であった。(9) の場面は、対象の特定のしにくさという点で、角館データの (4)、(5) の場面と類似している。しかし、A は、ガイド G のように、注意の転換、注意の調整という段階を踏まず、01 行目で、まだ B の視野に入っていない対象を直接「あれ」と指し、共同注意確立活動を開始する。それと同時に A は「ドーム」という対象の形状に関する手がかりを与えてはいるが、B は対象を特定できず、02 行目で A の方に歩み寄り、体を前に傾けて B の指さしの先を見つめるとともに「どれ 山？」とさらなる情報を求める (図 16 参照)。それに応え、03 行目から A は、「あれ」を「あの」という指示決定詞に切り替えて注意調整の段階を開始し、活動を修復する。「あの」とともに「白い山みたいな」と、B が把握している情報に合わせた手がかりを与え、さらに指さしをしている指を、対象をなぞるように動かし、畳みかけるように「雪山」という情報を与える。これにより、対象特定のための情報を十分に与えたと判断した A は、指さしを停止し、腕を組み、指示形式を「あれ」に戻す。06 行目の B の発話は、01 行目の A の質問への答えとなっており、対象が特定されたという A の判断を保証している。

A の発話によって開始される共同注意確立活動は、角館データでガイド G が行っているものに比べ、オーガナイズされていない。そのため、B は、自ら視野を転換する、質問を発するなどして、共同注意確立のために能動的に行動をしなければならない。本稿が角館データを用いて提示した、聞き手の負荷を減らすべく構成された共同注意確立活動の構造を知ること、(9) のように、聞き手の特定の失敗や話し手による活動の修復を含む、より複雑な共同注意活動の構造を理解することが容易になると思われる。

6. おわりに

以上、本稿では、自然談話データを用いて、話し手が特定の対象に向け共同注意を確立していく過程を詳細に観察し、話し手が、聞き手にとっての対象の特定のしやすさ、聞き手の注意の状態という相互行為的な要因に基づいて、指示詞の質的素性の表示を選択していることを示した。本研究は、共同注意確立活動という新たな指標を用いた指示詞分析を提案したという点、また、これまで行われてこなかった質的素性の使用に対する自然談話データを用いた分析を提示したという点で意義がある。

Levinson (2004) は、指示詞が聞き手の注意を発話場面の物理的文脈に引き付ける機能を持つのは、指示詞の意味が言語外の情報で補うべきスロット (slot) のようなものを持つためであるとし、これを「明白な意味的欠乏性 (obvious semantic deficiency)」(p. 101) と呼んだ。本稿で用いた自然談話データからは、話し手が指示詞のこの意味的な欠乏性を利用し、スロットを埋めさせるべく聞き手の注意を物理的な文脈へと引き付け続けながら、同時に非直示的な情報である質的素性を切り替えることによって、その注意の焦点を意図する対象に向けて調整していく様子が窺えた。

興味深いことに、角館データから抽出した11例全てにおいて、また上の(9)のようなより相互行為的なデータにおいても、話し手は、指示対象に対する情報を十分に与えたと判断すると同時に、素早く直示ジェスチャーを停止し、視線を指示対象から外し、さらに、質的素性を指示代名詞「-レ」に切り替え、次の活動を開始していた。伝統的な指示詞研究では、発話場面で知覚可能な対象へのジェスチャーを伴う指示は直示用法 (deictic use)、言語的に談話に導入された対象への指示は非直示用法であると定義されている。しかし、共同注意確立活動の後半もしくは活動後に現れる指示代名詞が指す対象は、発話場面に存在する物理的な対象ではあるが、活動の前半で言語的に導入された対象でもあり、しかもその指示においてジェスチャーは伴わない。このような指示は自然談話データにおいて頻繁に観察されるが、従来の定義では分類することが難しい。筆者は、指示詞の直示用法と非直示用法は、指示対象の違いという観点からではなく、対話参加者が従事している活動の違いと、それに伴い話し手が聞き手に求める注意の強弱という観点から論じることが適切であると考えるが、この点に関するさらなる分析は今後の課題とする。

参考文献

- Burenhult, N. 2003. "Attention, Accessibility, and the Addressee: The Case of the Jahai Demonstrative *ton*." *Pragmatics* 13, 363-379.
- Butterworth, G. 1995. "Origins of Mind in Perception and Action." In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 29-39. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.

- Corkum, V. and Moore, C. 1995. "Development of Joint Visual Attention in Infants." In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 61–84. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Diessel, H. 1999. *Demonstratives: Form, Function, and Grammaticalization*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Diessel, H. 2006. "Demonstratives, Joint Attention, and the Emergence of Grammar." *Cognitive Linguistics* 17, 463–489.
- Eilan, N. 2005. Joint Attention, Communication, and Mind. In: N. Eilan, C. Hoerl, T. McCormack and J. Roessler (eds.) *Joint Attention: Communication and Other Minds: Issues in Philosophy and Psychology*, 1–33. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, N. J. 2003. "Demonstratives in Space and Interaction: Data from Lao Speakers and Implications for Semantic Analysis." *Language* 79, 82–117.
- Hanks, W. F. 1990. *Referential Practice: Language and Lived Space Among the Maya*. Chicago: University of Chicago Press.
- 平田未季. 2016.「コ系の意味の再分析—指示詞体系における新たな最小の意味的対立—」、『国立国語研究所論集』、10、19–39.
- 平田未季・山本 真理. 2016.「共同注意確立活動におけるア系の有標性—会話分析の手法を用いた指示詞分析の一例—」、『日本認知言語学会論文集』、16、228–240.
- 金水敏. 1990.「方向と選択—コチラ類の指示詞—」、『日本語学』、9: 3、4–21.
- Laury, R. 1997. *Demonstratives in Interaction: The Emergence of a Definite Article in Finnish*. Amsterdam: John Benjamins.
- Levinson, S. C. 2004. "Deixis." In: L. R. Horn and G. Ward (eds.) *The Handbook of Pragmatics*, 97–121. Oxford: Blackwell Publishing.
- Meira, S. 2003. "Addressee Effects' in Demonstrative Systems: The Case of Tiriyo and Brazilian Portuguese." In F. Lenz (ed.) *Deictic Conceptualization of Space, Time and Person*, 3–11. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- 小川典子・澤田淳・大谷直輝. 2011.「日本語の人称詞の指示対象の拡張に関するコーパス分析」、『*Proceedings of Kansai Linguistic Society*』31, 96–107.
- Özyürek, A. 1998. "An Analysis of the Basic Meaning of Turkish Demonstratives in Face-to-face Conversational Interaction." In: S. Santi, I. Guañella, C. Cavé and G. Konopczynski (eds.) *Oralité et gestualité: Communication Multimodale, Interaction*, 609–614. Paris: L'Harmattan.
- 佐久間鼎. 1936.『現代日本語の表現と語法』東京：厚生閣.
- Strauss, S. 2002. "This, That, and It in Spoken American English: A Demonstrative System of Gradient Focus." *Language Science* 24, 131–152.
- 寺村秀夫. 1968.「日本語名詞の下位分類」、『日本語教育』、12、42–57.
- Tomasello, M. 1995. Joint Attention as Social Cognition. In: C. Moore and P. J. Dunham (eds.) *Joint Attention: Its Origin and Role in Development*, 103–130. Hillsdale: Lawrence Erlbaum.
- Tomasello, M. 1999. *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge: Harvard University Press.